

氏名	韓 希妊
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	第80号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	朝鮮時代の大型仏画‘掛仏幀’における材料及び制作技法の研究 —韓国国宝第297号1652年信謙作『安心寺靈山会掛仏幀』の原寸大古色復元模写を通して—
審査委員	主査 教授 宇野 茂男 教授 定金 計次 准教授 川嶋 渉 教授 田島 達也 講師 高林 弘実

論文の要旨

朝鮮後期の17世紀以降から作例が現れる掛仏幀は、野外で行われる仏教儀式に使用するために制作された巨大な仏画である。朝鮮の混乱した時代を背景に制作されはじめ、朝鮮後期の仏教信仰の特徴は無論、朝鮮後期の独特な仏画制作技法が見られる貴重な資料である。

掛仏幀は世界でも類例の少ない文化遺産であり、伝承されねばならないと思われるが、360余年に亘る歳月の経過の中で、需要の減少や印刷複製技術の発達などにより、掛仏幀制作に用いられた材料と技法は殆ど断絶してしまった。

このように、ほぼ途絶えてしまった絵画文化財の制作に関わる材料と制作技法を再び蘇らせ、保存・継承する方策は、次の通りである。

第一に、該当の絵画文化財が制作された歴史的背景と美術史的価値を十分に理解して作品を分析する。特に宗教絵画の場合は、宗教の特性と時代的背景が材料や技法などと強く関係するため、かかる側面に関する考察が十分になされなければならない。

第二に、原本の現状調査や科学的分析を通じ、制作に使用された材料と技法を解明する。

第三に、調査と分析を通して得られた資料を基にした模写制作を行い、材料と制作技法を記録に残す。

第四に、原本は現状維持を基本方針として、修理を施し保存する。そして以上に加えて、原本が果たして来た機能は、模写作品が代替することで、原本の保全を図る必要がある。

掛仏幀制作に使用された材料・制作技法の記録と資料化を目的とした本研究は、上記の方策に基づき、韓国国宝第297号『安心寺靈山会掛仏幀』を調査・分析し、なるべく原本に用いられた材料と技法による模写制作を行うことに重点を置いた。

模写対象に選定した『安心寺靈山会掛仏幀』は17世紀の超大型仏画を代表する作であり、原本の状態が比較的良好で、掛仏幀の材料と制作技法研究において大きな価値を有している。

名称	『安心寺靈山会掛仏幀』
文化財指定種目・指定番号	国宝 第297号
所蔵先	韓国忠清南都清原郡 安心寺
制作年度	1652年(孝宗3年) 順治九年任辰四月日
制作者	信謙 徳熙 智彦 眞性 信律 三印 敬元 明戒 恵日
法量	総法量 修理前：縦726cm×横472cm 修理後：縦837cm×横481cm 画面法量 縦631cm×横461.3cm

『安心寺靈山会掛仏幀』は法華系図像の靈山会上図の群図形式を構えており、本尊を中心に多数の聖衆と眷属を配置する朝鮮前期の伝統的様式で描かれている。2005年を前後に修理が施されたようであるが、報告書が作成されておらず、詳しい修理内容や日程などは不明である。全体的な原本の現状は一見良好とは見えるが、修理前の写真と修理後の写真(原本調査時に撮影)を比較すると、修理補修による彩色層の深刻な損傷が進行しており、毎年行われる献掛儀式が損傷を加速化させていると推察される。

顔料分析は試料採取の際に発生する原画の損傷を考慮し、携帯用XRF装置を使用して非破壊調査を行った。『安心寺靈山会掛仏幀』からは水銀(Hg)、硫黄(S)、鉛(Pb)、砒素(As)、銅(Cu)、塩素(Cl)、金(Au)、カルシウム(Ca)が検出され、朱、鉛白、黄丹、鉛丹、石黄、緑塩銅鉱、藍銅鉱、金、胡粉などの彩色材料を用いたと判断される。現在まで調査分析された朝鮮後期の超大型仏画に使用された彩色材料と比較して見ると、用いられた顔料はほぼ同一のものであったと推測されるが、より幅広い科学的調査が必要であると考えられる。

朝鮮後期には多様な基底材を用いた仏画が制作された。掛仏幀制作の盛行により、仏画制作に使用した基底材はもちろん、制作技法にも変化が現れたとみなされる。掛仏幀の画幅制作の特徴は、四つに分けて考えられる。

第一に、主に布を基底材に使用し、平らな床に固定して裏打ちをする。

第二に、最初に画稿を制作し、裏打ち、彩色の手順で制作する。

第三に、下絵が肌裏紙になる。

第四に、紙や布などを用いて20～30回の裏打ちをする。

掛仏幀の裏打ちは朝鮮後期に制作された巨大な仏画の画幅を制作する独自の技法であり、重要な工程であるため、本論文では全工程を再現し、記録した。

模写制作は原本と随時対照・観察しつつ行うのが理想であるが、現実的には不可能な場合が多い。また、写真資料や影印本などは印刷機により色彩の差が激しく、色見本を作製し、それを基準として原画に近い色調を再現した。掛仏幀の彩色は高麗仏画の代表的彩色技法である裏彩色技法を用いていないということ、厚塗りの彩色をしていないという二つの特徴がある。

以上のように本論文では『安心寺靈山会掛仏幀』の科学的分析と調査を基礎に、原寸大古色復元模写を実施し、掛仏幀制作に使用された材料や制作技法を研究・記録し、資料として提示した。また、

資料のデジタル化が急速に進展する中、それを踏まえて断絶しつつある絵画文化財の制作に関わる全般、つまり、材料とその使い方、伝統材料を使用した制作技法などの保存と継承方法に関して論じた。本研究が今後、絵画文化財の復元制作における材料と技法研究進展の礎になり、途絶えた伝統を蘇らせ、先祖から受け継いだ文化遺産を後世に継承し、発展させる契機となることを願って止まない。

審査結果の要旨

保存修復領域 韓 希姫（ハン ヒジョン）の本審査の発表は、「17世紀の朝鮮時代の大型仏画『掛仏幀』の材料と制作技法」を明らかにするため、「安心寺霊山会掛仏幀」の古色復元制作を発表するものであった。

本審査では、7月に行われた第二回目の理論演習での発表を踏まえて、復元制作を中心に行われた。

高さ7m 横5mに及ぶ圧倒的な大きさの大型仏画、『掛仏幀』の復元制作に向けてのプロセスは、並大抵の努力ではクリア出来ない問題点も多くあったと思われる。当時としても莫大な資金と資材が必要であり、多くの人の手が必要であった大事業を、一人の人間が行うことは、論文と実制作ともに限度を超えたものであり、完成にまで後少しに辿り着いたことは大いに評価できる。

論文の主たる研究内容は、掛仏幀の復元模写制作に関わる、歴史的、美術史的、科学的な調査研究と、実際に行った模写制作の研究である。現存する掛仏幀の概観や16世紀に制作が始まった歴史的背景、あるいは図像学的特質、様式及び材料・技法の問題等を取り上げ論じていた。そして結論で模写制作は伝統の継承と保存のために必要だと述べ、復元制作を理論面で支える研究としては、十分に基準を超えた十全なものと言える。

韓 希姫は、殆ど断絶した技法を復活させて制作するため、調査や分析あるいは考察によって出来るだけ同じ材料と制作過程を探求して、同一素材・同一技法で制作にあたった。

このことは、本大学の保存修復の教育目的である、実際に作業をして絵が描ける技術と力を持つ人材を育てるという目的に合ったものである。

審査員から論文の問題点として挙げられたことは、研究対象となる絵画作例が、文化財としてどちらかと言えば民俗資料に属するものであるため、論文で論述された実際の内容において、掛仏幀の図像と様式について、正統的な仏教図像と比較して適切な解釈が不可能な部分を多く含んでおり、十分な客観的成果を見たとは言いがたいとの指摘もあった。

また、制作に際しては、原画の自然科学的な調査を実施し、彩色材料の推定を行っているが、論文の記述には論理的に飛躍している記述があり、若干の修正が必要であるとの指摘もあった。

そして、古色復元模写についても質問が挙げられ、本来の趣旨からいえば、原本の代替物としてお寺で使用されることを想定するならば、復元模写が適当であると考えられるが、復元の方針・仕様について論文の中でもっと詳しくなされるべきではなかったかと言う指摘もあった。

しかしながら、本研究は、審査教員の全体の評価として、歴史的、美術史的、科学的な調査研究、描き手の経験から読み取って進めていくと言った一連の古色復元模写を評価できるとの所見を頂いた。

本研究は総じてよくまとまっており、掛仏幀の保存と伝統的な絵画技術の継承に関して、韓国の文化財保存の現状を踏まえて計画された意義のある研究であり、博士号にふさわしいものであるとの結論に至った。

掛仏幀は、これからも宗教儀式に使い続けられるものである。しかし、年月の経過とともに、必ず劣化、剥落、変色を生ずることが考えられ、その時「掛仏幀」の持つ意味と役割を伝えるためには、材料と技法、そして実際に描くことの出来る実技者が必要となるだろう。

この研究は、材料と技法、制作方法が判ったとしても、描けるものではない。制作には体験しなければ気づかないこと、言葉では言い表せない感覚的なことが隠されている。本研究では論文に書かれている内容以上に、韓さんが得た物は沢山あるだろう。このことを論文にするのはとても難しいものであり。博士論文という、紙媒体にまとめられた内容だけでは伝えきれないものも多く。この先、多くの研究者がアクセスしやすい資料と公開形態を期待するものである。

以上を、保存修復領域 韓 希妊（ハン ヒジョン）の博士論文審査結果の要旨とする。